

総 説

調和の概念分析
～がんサバイバーへの看護実践・研究における概念活用の有用性～

Concept Analysis of Harmony
～Usefulness of Harmony in Nursing Practice and
Research on Cancer Survivors～

岡 西 幸 恵 (Sachie Okanishi)*¹ 藤 田 佐 和 (Sawa Fujita)*²

要 約

本研究の目的は、調和の概念を明確にし、がん看護実践や研究に有用な概念であるかを検討することである。60件の文献を対象とし、Walker & Avantの概念分析の手法を参考に分析をした。その結果、属性は【自分の枠の拡張】【自己リズムの創出】【自己と環境との融合】【心地よさ】、先行要件は【自己が脅かされる状況】【コントロール感を失う状況】、帰結は【生きる力】【健康】【成長】が抽出された。

調和は、自己が脅かされる状況やコントロール感を失う状況に直面した時に、自己や自己を取り巻く環境の影響を受けながら、自分の枠を拡張、自己リズムを創出し、新たな状況に置かれた自己や環境と融合することで、心地よさを感じている状態である。調和は、がんサバイバーの健康を支え、自分らしく生きることを支援するうえで適用できる概念であり、がん看護実践・研究において有用な概念であることが示唆された。

Abstract

The purpose of this study was to clarify the concept of harmony and investigate whether it is a useful concept in oncology nursing practice and research. An analysis of 60 published manuscripts was performed with reference to the concept analysis method of Walker and Avant. As a result, the following were extracted: "Expansion of one's framework", "Creation of self-rhythms", "Merging of self and environment", and "Comfort" as attributes; "Situations that threaten the self" and "Situations in which the feeling of control is lost" as antecedents; and "Zest for living", "Health", and "Growth" as consequences.

Harmony is the state of comfort felt from the expansion of one's framework, creation of self-rhythms, and merging with the self and environment when placed in new situations, while at the same time being affected by the self and the surrounding environment, when facing situations in which the self is threatened or the feeling of control is lost. The results of this study suggest that harmony is a concept that can be applied to supporting cancer survivors in terms of health and living lives true to themselves and is a useful concept in oncology nursing practice and research.

キーワード：調和 概念分析 がんサバイバー がん看護

*¹ 香川県立保健医療大学

*² 高知県立大学看護学部

I. は じ め に

わが国のがんは、診断や治療技術の進歩によって5年生存率は向上し、がんを抱えながら長期に生存するがんサバイバーが増加している。それに伴い、がんは慢性疾患として捉えられ、がんと診断された人びとの関心は、「どれだけ生存できるか」ととどまらず、治療を終えた後の人生を「どのように生きていくのか」という問いへと広がりつつある（近藤他, 2019）。厚生労働省（2018）は、第3期がん対策推進基本計画の全体目標の一つに「がんとの共生」を掲げており、がんと診断された時から生涯にわたり「いかに自分らしく生きるか」を重視した、がんサバイバーの生き方やQuality of Lifeを支える視点への転換を求めている。また、保健医療2035提言書の中では、2035年までに必要な保健医療のパラダイムシフトとして「キュア中心からケア中心へ」を示し、慢性疾患や一定の支障を抱えても生活の質を維持・向上させ、身体的のみならず精神的・社会的な意味も含めた健康を保つことを目指す重要性を示している（厚生労働省, 2015）。したがって、がんと共に生きるがんサバイバーが自分らしく生活し続けられるよう支援するためには、がんサバイバーの健康を支える支援の探求が重要であると考えらる。

健康とは主観的な経験であり、身体-心-スピリットが統一され、調和している状態を指す。人はそれぞれ、自己が他の人や地域・環境・自然・宇宙・根源と調和し、一体になり、統一体であることを目指しており、人の内部において、調和がとれている場合は、知覚された自己と経験された自己との間に一致感があり、調和がとれていない場合は、知覚された自己と経験された自己との間にずれを感じ、怯え、不安、絶望感や恐怖感などを抱いて不健康になる（Watson, 2012/2014）。がんサバイバーは、がんという疾患や侵襲の強い治療に伴う身体的問題だけでなく、日常生活や仕事への影響、再発や転移、死への恐れや不安など心理社会的問題に向き合うことを余儀なくされている。また、がんサバイバーは、寛解といわれる5年を超えて、10年後、それ以降に再発・転移することもまれではなく、根治治療後に新たながんに罹患することもあり、

治療を終えた後もがんという疾患から解放されることはない。このようなストレスフルな状況に馴染めない場合、自己に否定的感情を抱き、自らの環境を縮小させるなど、抑うつや社会的孤独感を高めることが報告されている（Dropkin, 1989）。一方で、調和の方向へ向かう場合、生活の質を高め、心身共に満たされた、豊かな生き方が可能になることから（Jonsson et al, 2010; Balthip et al, 2013）、がんサバイバーの調和を促進することは、がんサバイバーの健康を支え、がんを抱えながらも自分らしい生活を送るために重要な要素になると考えられる。

しかし、調和という概念は、看護学のほか、社会学、心理学、教育学など幅広い学問領域で取りあげられているが、どの学問領域においても、調和の概念を明確に定義したものはあまりなく、曖昧な意味合いで用いられている現状である。したがって、調和の概念を明確にすることは、看護の中で生じている現象を理解することにつながり、調和を促進する看護支援の一助になることが期待される。そこで本研究では、調和の概念を明確にし、がんサバイバーへの看護実践や研究に有用な概念であるかを検討することを目的に概念分析を行う。

II. 研 究 目 的

本研究の目的は、「調和」の概念分析を行い、がんサバイバーへの看護実践や研究に有用な概念であるかを検討することである。

III. 研 究 方 法

1. データ収集方法

国内文献については、「医学中央雑誌（1983年～2019年）」「CiNii」を用いて、「調和」、「調和and概念」をキーワード検索したところ、689文献が抽出された。また、海外文献については、「CINAHL/MEDLINE（1981年～2019年）」、「PubMed」を用いて、「harmony」、「harmony and concept analysis」をキーワード検索したところ、1692文献が抽出された。これらの文献から、重複している文献、会議録、解説、事例・症例報告を除外し、原著論文のみに限定した。そのうち、論

文タイトルや要約、入手可能な本文を確認し、人間の調和に関する内容の説明や意味、定義を含む文献を選択した。さらに、ハンドサーチにて重要と思われる文献を加え、最終的に60文献（国内文献25件、海外文献35件）を分析対象とした。

2. 分析方法

Walker & Avant (2005/2008) の概念分析の手法を参考にした。この分析方法は、概念の構造と機能を調べることを目的としている。分析手順は、①概念を選択する、②分析の目的を決定する、③概念の用法を明らかにする、④概念を定義づける属性を明らかにする、⑤モデル例を明らかにする、⑥補足例を明らかにする、⑦先行要件と結果を明らかにする、⑧経験的指示対象を明らかにする、の8つのステップである。本研究では、調和の概念を選択し、概念の用法を整理したうえで、がんサバイバーへの看護実践や研究に有用であるかを検討することを分析の目的とした。分析対象の各文献において、調和の定義や構成要素に関する記述を抽出した。抽出した内容については類似性、相違性を検討しながらサブカテゴリーを生成した。さらに抽象化してカテゴリーを生成し、調和の概念を定義づける属性とした。次に、調和の先行要件と帰結については、各文献から内容を抽出し、属性との関係を検討しながら、カテゴリーを生成した。最後に、調和の属性を検証するために、関連概念との類似性と相違性を検討し、調和の概念を定義した。本研究では、モデル例、補足例、経験的指示対象を明らかにする手順は省略した。

IV. 結 果

1. 調和の概念の用法

1) 辞典による言葉の意味

調和とは、「調」（仲良くなる、ととのえる、なつく）と「和」（やわらぐ、なごむ）を組み合わせ構成された中国起源の漢語である。調和の訳語であるharmonyは、古代インドヨーロッパ語の語根「ar」（つなぎ合わせる）から派生した言葉である。辞典によると、調和は「うまくつり合い、全体が整っていること、いくつ

かのものが矛盾なく互いにほどよいこと、ものごととものごとが互いに和合していること（新村, 2018; 松村, 2006)」の意味をもつ。また、harmonyは「平和な存在と合意の状態、一緒に演奏または歌われる異なる音符を組み合わせて心地よい音を出す方法、関連するものの心地よい組み合わせ（Oxford University Press, 2010）」の意味をもつ。すなわち、一般的に調和は、複数のものが互いを尊重しながら、全体が和むようにまとまることとして捉えられている。

2) 調和の概念の起源

調和の概念は、東洋と西洋それぞれ独自の文化から発見された概念である。西洋における調和の概念は、事物や事象の全体的な均衡の美を表す観念であり、その起源は古代ギリシャにまで遡ることができる。ギリシャ語のharmoniaは元来、大工仕事において建材の各部を互いに噛み合わせて、ぴったり接合することから派生し、一致、協力、和合などの意味をもつようになった。この概念に哲学的な意義が付与されるようになったのは、音楽的調和の観点から宇宙論を展開したピタゴラスによると言われている（下村, 2004）。ピタゴラスは、音の高さと弦の張力あるいはその長さとの間に数の比例関係を発見し、「万物の根源は数」という思想を確立した。そして、秩序ある世界を解明するために、「数の学」算術、「形の学」幾何学、「星の学」天文学、「調和の学」音楽の4つの学問を発展させた。なかでも、音楽は、ピタゴラスの思想を継承したプラトンやアリストテレスによって、「魂の調和を促すもの」、「徳を形成するための教育手段」として、人間の徳の涵養との関わりにおける教育的意義の重要性が説かれた（門屋, 2016; 工藤, 2016; 上垣, 2012）。東洋における調和の起源は孔子の思想に遡ることができる。孔子の思想である「和して同ぜず」「中庸の徳たるや」は、相手に簡単に合わせるのではなく、相手をよく理解し、互いの相違を認め合ったうえで調和することであり、調和を発揮するには中庸が必要であると説いた。古代中国哲学者も、自然と調和して生きることや他人と調和することの重要性を強調している。また、日本において調和の概念は基本的な価値観の1つとして捉え

られている。聖徳太子は、調和の概念を「和」と捉え、「十七条の憲法」の中で「和を以て貴しと為す」と提言し、秩序を踏まえて互いに協力し合う関係にあることが大事であると説いた (Fabio, 2018 ; 実松, 2018 ; 荒木, 2012 ; Konishi et al, 2009)。現在では、数学や物理学などの学問領域において、「調和関数」「調和級数」「調和数列」「調和平均」「調和積分」など、法則や計算に関わる内容を指す概念として用いられている (下村, 2004)。また、芸術、建築、歯学などの学問領域では、色彩調和、デザインや建築物との調和、顎口腔の形態美・色彩美・機能美の調和などと表現され、均衡の美や対称性に関わる内容を指す概念として用いられている (大窪, 2014 ; 日本歯科審美学会, 2015)。さらに、教育、心理、社会、倫理、哲学などの学問領域では、人間形成や人間関係に関わる内容を指す概念として用いられている (隈元, 2017 ; 盛下, 2015)。以上より、調和の概念は、算術、幾何学、天文学、音楽の4つの学問に加えて、人間の心や精神に倫理的・教育的な作用を発揮するもの、人間集団における良好な関係性や社会秩序を形成するものとして、多くの学問領域で用いられている。しかし、いずれの学問領域も調和の概念を明確に定義したものはあまりなく、文章中の記述で活用されている状況である。

2. 調和の属性・先行要件・帰結

調和の概念分析の結果、4つの属性、2つの先行要件、3つの帰結が抽出された (図1)。以下、本文中の【】はカテゴリー、<>はサブカテゴリーを示す。

1) 属 性

調和の属性として【自分の枠の拡張】【自己リズムの創出】【自己と環境との融合】【心地よさ】の4つの属性が抽出された。裏付けとなる文献は表1の通りである。

(1) 【自分の枠の拡張】

【自分の枠の拡張】とは、置かれた状況にとらわれず、自分の思考や価値観を変容させ、その状況に対する意味を見出し、良い方向に考えていくことを表わす。【自分の枠の拡張】とは、<意味を見出す><自己を受け入れる><状況を肯定する><希望をもつ>から構成されている。<意味を見出す>は9文献でみられ、生きる意味を考える (Jonsson, 2010 ; Lu, 2002 ; Sun, 2016 ; 関谷, 1998 ; 竹田, 2007 ; 生田, 2011 ; 原, 2019 ; 酒井, 2009)、自己の存在意義を見出す (北, 2002 ; 生田, 2011 ; 原, 2019 ; 酒井, 2009) など、自己の内面と向き合い、現在の状況に意味を見出そうとすることを表わす。<自己を受け入れる>は20文献でみられ、今の自分を受け入れる (Chukumnerd, 2011 ; Rashotte, 2014 ; Shimizu,

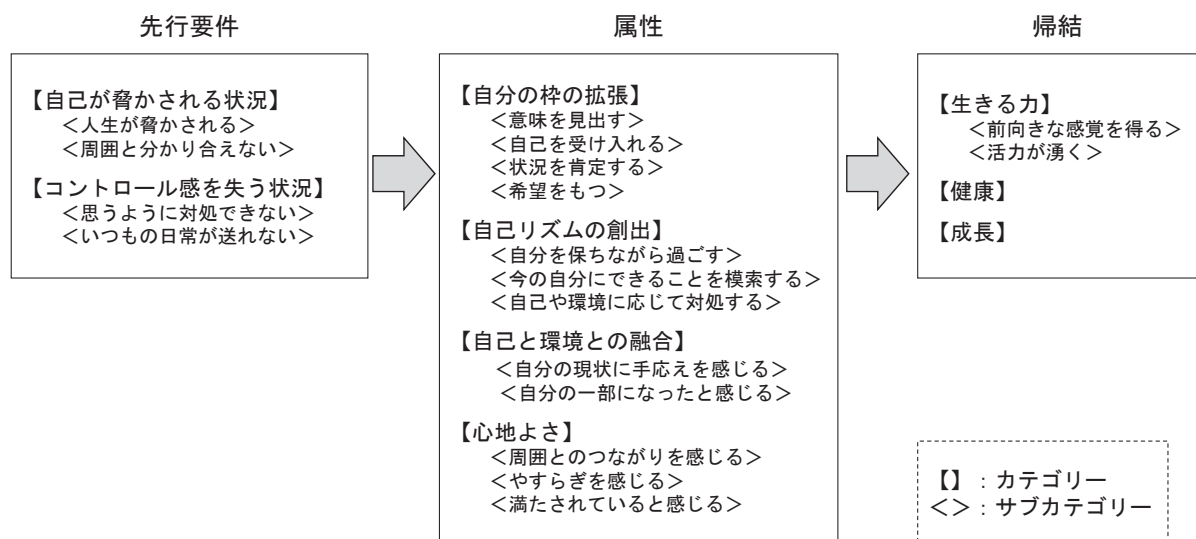


図1 調和の先行要件・属性・帰結

表1 調和の属性

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文 献
自分の枠の拡張	意味を見出す	生きる意味を考える	Jonsson, 2010; Lu, 2002; Sun, 2016; 関谷, 1998; 竹田, 2007; 生田, 2011; 原, 2019; 酒井, 2009
		自己の存在意義を見出す	北, 2002; 生田, 2011; 原, 2019; 酒井, 2009
	自己を受け入れる	今の自分を受け入れる	Chukumnerd, 2011; Rashotte, 2014; Shimizu, 2007; 関谷, 1998; 中戸川, 2016; 山岡, 2007; 生田, 2011; 上野, 2014; 原, 2019
		自然の出来事を人生の一部とする	Delmar, 2005; Lee, 2011; Ebrahimi, 2012; Balthip, 2013; Lowe, 2002
		自分に生じた問題と共に生きる	Hollman, 2004; Lee, 2011; 野村, 2004; 森谷, 2009; 高山, 2012; 瓜生, 2015; 酒井, 2009
	状況を肯定する	経験を糧に状況を肯定する	Jonsson, 2010; Ebrahimi, 2012; Hodge, 2009; 森谷, 2009
		現状に対する認識を変える	Ebrahimi, 2012; Rashotte, 2014; 池添, 2009a; 瓜生, 2015; 永井, 2007; 酒井, 2009
	希望をもつ	状況をポジティブに捉える	Delmar, 2005; Lundström, 2017; 山内, 2016; 原, 2019
		希望を見出す	Delmar, 2005; Shirahama, 2001; Yurkovich, 2008; Rashotte, 2014; 関谷, 1998; 高山, 2012; 中戸川, 2016; 小笹由, 2006; 酒井, 2009
		主体的な行動への意欲をもつ	Hollman, 2004; Songwathana, 2013; 石川, 2004; 池添, 2009a; 山内, 2016
		目標に向かって努力する	Lee, 2011; Lundström, 2017; Ebrahimi, 2012; Rashotte, 2014; Cumbie, 2001; Hodge, 2009; 関谷, 1998
自己リズムの創出	自分を保ちながら過ごす	社会的役割を果たす	Lee, 2011; Pincharoen, 2003; Ebrahimi, 2012; Naemiratch, 2008; 森谷, 2009; 池添, 2009a; 中戸川, 2016
		周囲との関係を保つ	Kay, 2018; Pincharoen, 2003; Hsu, 2004; 関谷, 1998; 野村, 2004; 池添, 2009a
		普段通りに生活する	Lundström, 2017; Lu, 2002; Ebrahimi, 2012; Naemiratch, 2008; Hsu, 2004; 瓜生, 2015; 原, 2019
		自分のペースを保つ	Jonsson, 2010; Lee, 2011; Olsson, 2015; 池添, 2009a; 高山, 2012; 瓜生, 2015; 戸田, 2017; 原, 2019; 酒井, 2009
	今の自分にできることを模索する	自分の状態を把握する	Bode, 2010; Lee, 2011; Ellingsen, 2013; 阿川, 2012; 原, 2019
		今の自分にできる方法を考える	Hollman, 2004; Jonsson, 2010; Olsson, 2015; Ebrahimi, 2012; Shimizu, 2007; 山内, 2016; 中戸川, 2016; 生田, 2011; 酒井, 2009
		日常への取り込み方を模索する	Lundström, 2017; 関谷, 1998; 森谷, 2009; 瓜生, 2015; 原, 2019
	自己や環境に応じて対処する	状況に合わせて対処する	Lowe, 2002; 石川, 2004; 森谷, 2009; 池添, 2009a; 高山, 2012; 瓜生, 2015; 北, 2002; 永井, 2007; 上野, 2014; 戸田, 2017; 原, 2019; 酒井, 2009
		他者と体験を共有する	Hollman, 2004; Olsson, 2015; Ebrahimi, 2012; Rashotte, 2014; 山内, 2016; 北, 2002; 小笹由, 2006; 竹田, 2007
		心身のバランスをとる	Daly, 1995; Hollman, 2004; Jonsson, 2010; Pincharoen, 2003; 酒井, 2009
自己と環境との融合	自分の現状に手応えを感じる	自分なりの生活パターンをつかむ	Ebrahimi, 2012; 池添, 2009a; 高山, 2012; 瓜生, 2015; 中戸川, 2016; 戸田, 2017
		上手くコントロールできていると感じる	Pincharoen, 2003; 関谷, 1998; 石川, 2004; 池添, 2009a; 北, 2002
		自己の状態や管理法に自信をもつ	Chukumnerd, 2011; Olsson, 2015; 石川, 2004; 池添, 2009a; 生田, 2011
	自分の一部になったと感じる	新たな状況で生活することに慣れる	Delmar, 2005; 石川, 2004; 上野, 2014
		自分との違和感がなくなる	Hollman, 2004; Delmar, 2005; Bode, 2010; 高山, 2012
		普通に過ごせていると感じる	Jonsson, 2010; Chukumnerd, 2011; 石川, 2004; 阿川, 2012
心地よさ	周囲とのつながりを感じる	周囲に対して感謝の気持ちをもつ	Shirahama, 2001; Ebrahimi, 2012; Balthip, 2013; 中戸川, 2016; 生田, 2011; 原, 2019; 酒井, 2009
		人に支えられ必要とされている	Hollman, 2004; Olsson, 2015; 石川, 2004; 酒井, 2009
		人や自然の中でつながりを感じる	Hollman, 2004; Olsson, 2015; Shirahama, 2001; Hallberg, 2004; Ebrahimi, 2012; Naemiratch, 2008; 竹田, 2007; 生田, 2011; 原, 2019
	やすらぎを感じる	気持ちが落ち着く	Daly, 1995; Jim, 2006a; Olsson, 2015; Sun, 2016; Jim, 2006b; Simonelli, 2008; 山内, 2016
		快適さを感じる	Jim, 2006a; Olsson, 2015; Sun, 2016; Jim, 2006b; Simonelli, 2008; 高山, 2012
		穏やかさを感じる	Daly, 1995; Jim, 2006a; Ellingsen, 2013; Olsson, 2015; Shirahama, 2001; Yurkovich, 2008; Rashotte, 2014; Lindvall, 2016; Sun, 2016; Jim, 2006b; Simonelli, 2008; 酒井, 2009
	満たされていると感じる	互いのニーズが満たされる	山崎, 1997; 中戸川, 2016; 北, 2002; 酒井, 2009
		幸せを感じる	Ebrahimi, 2012; Lindvall, 2016; Shimizu, 2007; Haley, 2006; 北, 2002
		人生そのものに満足する	Hollman, 2004; Olsson, 2015; Ebrahimi, 2012; 関谷, 1998; 生田, 2011; 酒井, 2009

2007；関谷, 1998；中戸川, 2016；山岡, 2007；生田, 2011；上野, 2014；原, 2019）、自然の出来事を人生の一部とする（Delmar, 2005；Lee, 2011；Ebrahimi, 2012；Balthip, 2013；Lowe, 2002）、自分に生じた問題と共に生きる（Hollman, 2004；Lee, 2011；野村, 2004；森谷, 2009；高山, 2012；瓜生, 2015；酒井, 2009）など、置かれた状況を自分のこととして受け入れていくことを表わす。＜状況を肯定する＞は13文献でみられ、過去の実験を糧に状況を肯定する（Jonsson, 2010；Ebrahimi, 2012；Hodge, 2009；森谷, 2009）、現状に対する認識を変える（Ebrahimi, 2012；Rashotte, 2014；池添, 2009a；瓜生, 2015；永井, 2007；酒井, 2009）、状況をポジティブに捉える（Delmar, 2005；Lundström, 2017；山内, 2016；原, 2019）など、現在の状況を肯定的に解釈することを表わす。＜希望をもつ＞は19文献でみられ、希望を見出す（Delmar, 2005；Shirahama, 2001；Yurkovich, 2008；Rashotte, 2014；関谷, 1998；高山, 2012；中戸川, 2016；小笹由, 2006；酒井, 2009）、主体的な行動への意欲をもつ（Hollman, 2004；Songwathana, 2013；石川, 2004；池添, 2009a；山内, 2016）、目標に向かって努力する（Lee, 2011；Lundström, 2017；Ebrahimi, 2012；Rashotte, 2014；Cumbie, 2001；Hodge, 2009；関谷, 1998）など、置かれた状況に対して積極的に対処するための希望をもつことを表わす。

(2) 【自己リズムの創出】

【自己リズムの創出】とは、新たな状況の中で揺るぎない日常を送るために、これまでの自分らしさを基盤にしながら今の自分の状態でできることを模索し、自分に合った方法を見出していく対処行動を表わす。【自己リズムの創出】とは、＜自分を保ちながら過ごす＞＜今の自分にできることを模索する＞＜自己や環境に応じて対処する＞から構成されている。＜自分を保ちながら過ごす＞は21文献でみられ、社会的役割を果たす（Lee, 2011；Pincharoen, 2003；Ebrahimi, 2012；Naemiratch, 2008；森谷, 2009；池添, 2009a；中戸川, 2016）、周囲との関係を保つ（Kay, 2018；Pincharoen, 2003；Hsu, 2004；関谷, 1998；野村, 2004；池添, 2009a）、普段通りに生活する（Lundström, 2017；Lu, 2002；Ebrahimi, 2012；Naemiratch, 2008；Hsu, 2004；瓜生, 2015；原, 2019）、自分の

ペースを保つ（Jonsson, 2010；Lee, 2011；Olsson, 2015；池添, 2009a；高山, 2012；瓜生, 2015；戸田, 2017；原, 2019；酒井, 2009）など、これまでの自分を大切しながら生活することを表わす。＜今の自分にできることを模索する＞は18文献でみられ、自分の状態を把握する（Bode, 2010；Lee, 2011；Ellingsen, 2013；阿川, 2012；原, 2019）、今の自分にできる方法を考える（Hollman, 2004；Jonsson, 2010；Olsson, 2015；Ebrahimi, 2012；Shimizu, 2007；山内, 2016；中戸川, 2016；生田, 2011；酒井, 2009）、日常への取り込み方を模索する（Lundström, 2017；関谷, 1998；森谷, 2009；瓜生, 2015；原, 2019）など、今の自分に合った方法を見出そうと試行錯誤することを表わす。＜自己や環境に応じて対処する＞は22文献でみられ、状況に合わせて対処する（Lowe, 2002；石川, 2004；森谷, 2009；池添, 2009a；高山, 2012；瓜生, 2015；北, 2002；永井, 2007；上野, 2014；戸田, 2017；原, 2019；酒井, 2009）、他者と体験を共有する（Hollman, 2004；Olsson, 2015；Ebrahimi, 2012；Rashotte, 2014；山内, 2016；北, 2002；小笹, 2006；竹田, 2007）、心身のバランスをとる（Daly, 1995；Hollman, 2004；Jonsson, 2010；Pincharoen, 2003；酒井, 2009）など、安定した状況を目指して、自己の内面や自己に関わる周囲の状況に応じて対処することを表わす。

(3) 【自己と環境との融合】

【自己と環境との融合】とは、新たな状況が自分の中に溶け込み、上手く対処している自分を新しい自分として認識することを表わす。【自己と環境との融合】とは、＜自分の現状に手応えを感じる＞＜自分の一部になったと感じる＞から構成されている。＜自分の現状に手応えを感じる＞は13文献でみられ、自分なりの生活パターンをつかむ（Ebrahimi, 2012；池添, 2009a；高山, 2012；瓜生, 2015；中戸川, 2016；戸田, 2017）、上手くコントロールできていると感じる（Pincharoen, 2003；関谷, 1998；石川, 2004；池添, 2009a；北, 2002）、自己の状態や管理法に自信をもつ（Chukumnerd, 2011；Olsson, 2015；石川, 2004；池添, 2009a；生田, 2011）など、新たな状況に上手く対処できていることを認識することを表わす。＜自分の一部になったと感じる＞は、9文献でみられ、新たな状況で生活す

ることに慣れる (Delmar, 2005; 石川, 2004; 上野, 2014)、自分との違和感がなくなる (Hollman, 2004; Delmar, 2005; Bode, 2010; 高山, 2012)、普通に過ごせていると感じる (Jonsson, 2010; Chukumnerd, 2011; 石川, 2004; 阿川, 2012) など、新たな状況が自分の一部となり、新しい自分を認識することを表わす。

(4) 【心地よさ】

【心地よさ】とは、置かれた状況に対して心身ともに穏やかで満ち足りた癒しの感覚をもつ状態を表わす。【心地よさ】とは、＜周囲とのつながりを感じる＞＜やすらぎを感じる＞＜満たされていると感じる＞から構成されている。＜周囲とのつながりを感じる＞は、13文献でみられ、周囲に対して感謝の気持ちをもつ (Shirahama, 2001; Ebrahimi, 2012; Balhip, 2013; 中戸川, 2016; 生田, 2011; 原, 2019; 酒井, 2009)、人に支えられ必要とされている (Hollman, 2004; Olsson, 2015; 石川, 2004; 酒井, 2009)、人や自然の中でつながりを感じる (Hollman, 2004; Olsson, 2015; Shirahama, 2001; Hallberg, 2004; Ebrahimi, 2012; Naemiratch, 2008; 竹田, 2007; 生田, 2011; 原, 2019) など、自分以外の人間や社会の中に属していることへの気づきにより自己の存在価値を感じることを表わす。＜やすらぎを感じる＞は14文献でみられ、気持ちが落ち着く (Daly, 1995; Jim, 2006a; Olsson, 2015; Sun, 2016; Jim, 2006b; Simonelli, 2008; 山内, 2016)、快適さを感じる (Jim, 2006a; Olsson, 2015; Sun, 2016; Jim, 2006b; Simonelli, 2008; 高山, 2012)、穏やかさを感じる (Daly, 1995; Jim, 2006a; Ellingsen, 2013; Olsson, 2015; Shirahama, 2001; Yurkovich, 2008; Rashotte, 2014; Lindvall, 2016; Sun, 2016; Jim, 2006b; Simonelli, 2008; 酒井, 2009) など、置かれた状況に支配されず、心身の平穏さを感じていることを表わす。＜満たされていると感じる＞は12文献でみられ、互いのニーズが満たされる (山崎, 1997; 中戸川, 2016; 北, 2002; 酒井, 2009)、幸せを感じる (Ebrahimi, 2012; Lindvall, 2016; Shimizu, 2007; Haley, 2006; 北, 2002)、人生そのものに満足する (Hollman, 2004; Olsson, 2015; Ebrahimi, 2012; 関谷, 1998; 生田, 2011; 酒井, 2009) など、現在の状況に対して満ち足りた気持ちでいることを表わす。

2) 先行要件

調和の先行要件として【自己が脅かされる状況】【コントロール感を失う状況】の2つの先行要件が抽出された。

(1) 【自己が脅かされる状況】

【自己が脅かされる状況】とは、人生における困難な出来事や自己を取り巻く周囲との関係性に苦悩を感じる状況を表わす。【自己が脅かされる状況】は、＜人生が脅かされる＞＜周囲と分かり合えない＞から構成されている。＜人生が脅かされる＞は10文献でみられ、生命を脅かす病気の罹患や喪失体験により生きる意味や目的が見いだせない、自己存在が揺さぶられる、病の存在に脅威を感じるなど、死を意識する体験や病という不確かな状況を表わす (Hollman, 2004; Delmar, 2005; Jonsson, 2010; Ellingsen, 2013; Jim, 2006b; 野村, 2004; 森谷, 2009; 高山, 2012; 山内, 2016; 生田, 2011)。＜周囲と分かり合えない＞は8文献でみられ、医療者との意見の相違、病気や介護に対する周囲の偏見や無情の対応に苦しむなど、自己を取り巻く周囲から理解を得られない状況を表わす (Kay, 2018; 野村, 2004; 池添, 2009a; 池添, 2009b; 中戸川, 2016; 北, 2002; 瀬山, 2013; 藤代, 2015)。

(2) 【コントロール感を失う状況】

【コントロール感を失う状況】とは、置かれた状況に上手く対処できず、日常が妨げられるなど、これまで通りの方法では上手く対応できないことを表わす。【コントロール感を失う状況】は、＜思うように対処できない＞＜いつもの日常が送れない＞から構成されている。＜思うように対処できない＞は7文献でみられ、介護に負担を感じる、症状に対処できない、生活のペースが掴めないなど、置かれた状況に上手く対処できない自分に限界を感じていることを表わす (Ellingsen, 2013; 野村, 2004; 池添, 2009b; 高山, 2012; 山内, 2016; 中戸川, 2016; 石井, 2011)。＜いつもの日常が送れない＞は7文献でみられ、心身の状態により日常が制限される、慣れ親しんだ生活が妨げられるなど、これまでのような日常が送れないことを認識することを表わす (Yurkovich, 2008; Ebrahimi, 2012; Haley, 2006; 森谷, 2009; 池添, 2009a; 高山, 2012; 中戸川, 2016)。

3) 帰 結

調和の帰結として【生きる力】【健康】【成長】の3つの帰結が抽出された。

(1) 【生きる力】

【生きる力】は10文献でみられ、生きることへの〈前向きな感覚を得る〉こと (Jim, 2006a ; Hallberg, 2004 ; Lindvall, 2016 ; Sun, 2016 ; Jim, 2006b ; Simonelli, 2008) や〈活力が湧く〉こと (Yurkovich, 2008 ; Balhip, 2013 ; Lowe, 2002 ; Hodge, 2009) を表わす。

(2) 【健康】

【健康】は8文献でみられ、身体的、精神的、社会的、霊的な領域において満たされた良い健康状態を表わす (Lu, 2002 ; Yurkovich, 2008 ; Ebrahimi, 2012 ; O'Connor, 2007 ; Cumbie, 2001 ; Chan, 2005 ; Hodge, 2009 ; 山岡, 2007)。

(3) 【成長】

【成長】は5文献でみられ、自己成長や自己実現といった人生の発展を表わす (Ellingsen, 2013 ; Pincharoen, 2003 ; Sun, 2016 ; Cumbie, 2001 ; Chan, 2005)。

2. 調和の関連概念

調和と関連する概念として、「適応」と「調整」を取り上げ、これらの概念と調和の概念について検討する。

1) 適 応

適応は、様々な学問領域で定義や研究の動向が明らかにされている。使われる学問領域により定義は多義的であり、訳語も不一致であるため、概念は明確ではない。適応の一般的な意味は「ある状況に合うこと、ふさわしいこと、環境に合うように行動のし方や考え方を变えること、生存のために環境に応じて生物体の生理的・形態的な特質が变化すること (新村, 2018 ; 松村, 2006)」である。Lee et al (2006) は「うまく状況と調和すること」、Scotto et al (1980) は「もろもろの要求とそれを処理する力との間で均衡をとりながら統合性を維持するために行なう対処という努力の結果である」、北村 (1965) は「主体としての個人が、その欲求を満足させながら環境の諸条件のあるものに、親和的關係をもつ反応をするように、多少とも自分を変容させ

る過程である」と定義している。適応は、自分に置かれた状況を受け入れ、その状況に合うよう自己を変容させて対処する点においては調和と類似する。しかし、適応は、自分に置かれた状況に応じる対処過程であることに対し、調和はその対処を通して新しい自己との一体化を認識するコントロール感覚やその状況を心地よいと感じる主観的感覚をもつ点において相違がみられる。

2) 調 整

調整の一般的な意味は「調子の悪いものに手を加えてととのえること、ある基準に合わせて正しく整えること、過不足なくすること、つり合いのとれた状態にすること、折り合いをつけること (新村, 2018 ; 松村, 2006)」であり、調子や加減をととのえて程よい状態にすることを指す。心理学辞典では、「調整は規制とも訳され、不均衡を均衡へ向かわせる働き (中島他, 1999)」を意味し、看護学事典では「組織共通の目標を達成するため、内部均衡を図っていくこと (見藤他, 2003)」を意味する。調整は、不均衡な事柄や状況に対して折り合いをつけて望ましい状態にしていくことであり、安定した状態に向かって対処する点においては調和の概念と類似する。しかし、調整は、元の状態を基準にしてその基準に合うよう整えていくのに対し、調和は、新たな状況と一体になるよう整えていく点において相違がみられる。また、調整はつり合いがとれたかどうかではなく、そのプロセスに注目した概念であるが、調和は状態を示す概念でありプロセスを含む概念である。

V. 考 察

1. 調和の定義

概念分析の結果より、調和を以下のように定義した。

調和は、「自己が脅かされる状況やコントロール感を失う状況に直面した時に、自己や自己を取り巻く環境の影響を受けながら、自分の枠を拡げ、自己リズムを創出し、新たな状況に置かれた自己や環境と融合することで、心地よさを感じている状態」である。

調和は、【自分の枠の拡張】【自己リズムの創出】【自己と環境との融合】【心地よさ】の4つの構成要素から成る。人は、自己が脅かされる状況やコントロール感を失う状況に直面した時に、自分の思考や価値観を変容させ、その状況に対する意味を見出し、良い方向に考えようとする。そして、新たな状況の中でも以前の自分らしさを大切にしたい日常を送ろうと、自己の内面や自己を取り巻く環境の影響を受けながら、今の自分にできることを見出して安定を図ろうとする。調和は、個人に内在する内なる力、信頼できる人や拠り所の存在、個人を取り巻く環境という、自己、他者、環境との相互作用の中で生まれる特徴がある。その中で、新たな状況が自分の中に溶け込み、一体化する自分を認識することで、心地よさという癒しの感覚をもつようになる。また、調和は、【生きる力】【健康】【成長】に繋がり、看護はこの状態を促進する役割を担っていく必要がある。

2. がんサバイバーへの看護実践や研究における概念活用の有用性

がんサバイバーは、がんと共に生きることや現存もしくは潜在的な病的状態、すなわち消耗性のストレスを振り払えない人生を生きることが明らかになっていることから（藤田, 2003）、何らかの適応状態に至っても、新たな事態や問題への対処を繰り返していく必要がある。がんサバイバーは、がんによってもたらされた様々な限界のなかから、新しい自分らしさと生き方を獲得していくことが求められ（近藤他, 2019）、その過程を支援していくことが私たち医療者の重要な役割である。

調和の属性である【自分の枠の拡張】は、置かれた状況にとらわれず、自分の思考や価値観を変容させ、その状況に対する意味を見出し、良い方向に考えていくことを意味する。がんサバイバーは、様々な現実と直面する中で、自己の内面や自己を取り巻く環境の影響を受けながら、自己の存在価値を模索することを繰り返している。その中で、安定した自分へ統合できるためには、自分の価値観を変容させ、自己への了解や和解が必要になることから（川村, 2005；藤田, 2006；島田他, 2016）、がんとともに生き

る新しい生き方を見出すためには、がんサバイバーが＜意味を見出す＞＜自己を受け入れる＞＜状況を肯定する＞＜希望をもつ＞ことができるよう支援することが重要であると考え。調和の属性である【自己リズムの創出】は、これまでの自分らしさを保ちながら、今の自分の状態でできることを模索し、自分に合った方法を見出していくことである。＜自分を保ちながら過ごす＞＜今の自分にできることを模索する＞＜自己や環境に応じて対処する＞は、これまでの自分らしい生き方を基盤に、新たな自己や自己を取り巻く環境との均衡のとれた生き方を見出していく取り組みであるといえる。がんサバイバーは、普通の生活をするという文脈のなかで健康をとらえており（水野, 1997）、均衡のとれた生き方を見出す取り組みは、がんサバイバーが日常の平穏を取り戻すための主体的な対処行動である。看護者は、がんサバイバーの主体的な対処行動を支えると共に本来の自分を見失わないよう支援していくことが重要であると考え。調和の属性である【自己と環境との融合】は、新たな状況が自分の中に溶け込み、上手く対処している自分を新しい自分として認識することを意味する。浅野他（2003）は、がん患者は、がんに対して脅威を抱く自分から、自分とがんの関係性を見定めて、自分の身体に一体感を抱く自分へと変化し、新たな身体感覚を作り上げ、自分を回復の本質であると述べている。＜自分の現状に手応えを感じる＞や＜自分の一部になったと感じる＞という認識は、自分らしさが回復し、これまでの自分とは違う新たな自分を認識することである。これは、新たなコントロール感覚の獲得であり、看護者は、がんサバイバーが、がんと共に生きる新たな自分を認識できるよう、新たに獲得するコントロール感覚を高めていく支援が重要であると考え。調和の属性である【心地よさ】は、新たな状況に置かれた自己や環境に対して心身ともに穏やかで満ち足りた癒しの感覚をもつ状態を意味する。がんサバイバーは自己を取り巻く周囲のサポートや拠り所の存在の影響を受けながら、＜周囲とのつながりを感じる＞＜やすらぎを感じる＞＜満たされていると感じる＞ことで、自分の現在の状況を肯定的に捉え、がんとともに

生きる自分を認められるようになる。がんサバイバーが、がんを抱えても健康である自分を認識できるよう支援することも重要であると考え。調和の概念を基盤としたがんサバイバーへの看護実践は、がんサバイバーが自分らしく生きることを支え、それを維持できるよう支援していくうえで重要な概念であるといえる。

調和に関するがん看護領域の研究では、国内外において前立腺がん、肺がん、婦人科がん、前立腺がん、頭頸部がん、肝臓がん、白血病、HIVの患者やその家族を対象とした研究 (Balhithip, 2013; Jim, 2006a; Jonsson, 2010; O'Connor, 2007; Simonelli, 2008; 関谷, 1998; Sun, 2016; 高山, 2012) や、初発、再発・転移、終末期の患者を対象とした研究 (Balhithip, 2013; 原, 2019; 石井, 2011; Jim, 2006a; Jim, 2006b; Jonsson, 2010; 野村, 2004; O'Connor, 2007; 酒井, 2009; 瀬山, 2013; Simonelli, 2008; 関谷, 1998; Sun, 2016; 高山, 2012) がみられた。調和の概念は、がん種や病期に関わらず活用されており、病みの軌跡を辿るがんサバイバー全般に適用できる概念であると考え。また、先行研究の多くは、深刻な状況下でがんと共にどのように生き抜くかといった生き方や人生の意味についての記述のなかで調和の内容に触れている。調和という現象に焦点を当てた研究はあまり見当たらず、(Balhithip, 2013; 高山, 2012)、ほとんどの文献においてカテゴリー名や文章中の記載でとどまっている現状にある。しかし、これらの研究では、迫りくる死への複雑な心境や不確かさの中で、自分らしく生きる方向性へと切り開いていること、新たな生き方との一体化により生活に豊かさや満たされた感覚をもつことが示唆されている (Balhithip et al, 2013; 原, 2019; O'Connor et al, 2007; 酒井他, 2009)。調和を維持することは、健康を維持するための重要な基盤であり (Chan et al, 2005)、がんサバイバーの健康を支えるうえで、調和の概念を基盤とした看護支援を構築することは重要であるといえる。

このように、調和の概念は、がんサバイバーの健康を支えるために、新たな自分らしさの獲得やがんと共に自分らしく生きることを支援するうえで不可欠な概念であり、がんサバイバーへの看護実践や研究において活用可能な概念で

あると考えられる。今後は、多様な状況にあるがんサバイバーの調和がどのような様相であるのか、そしてどのようなプロセスを辿るのかについて明らかにするとともに、がんサバイバーの調和を維持、促進する看護支援を検討していくことが課題であると考え。

VI. 結 論

調和の概念を明確にし、がん看護実践や研究に有用な概念であるかを検討することを目的に研究を行った。概念分析を行った結果、属性は、【自分の枠の拡張】【自己リズムの創出】【自己と環境との融合】【心地よさ】、先行要件は、【自己が脅かされる状況】【コントロール感を失う状況】、帰結は、【生きる力】【健康】【成長】が抽出された。

調和は、自己が脅かされる状況やコントロール感を失う状況に直面した時に、自己や自己を取り巻く環境の影響を受けながら、自分の枠を拡張、自己リズムを創出し、新たな状況に置かれた自己や環境と融合することで心地よさを感じている状態である。調和は、がんサバイバーの健康を支え、自分らしく生きることを支援するうえで適用できる概念であり、がん看護実践・研究において有用な概念であることが示唆された。

謝 辞

本研究は、JSPS科研費JP20K10737の助成を受けたものです。

利益相反

本研究において申告すべき利益相反事項はない。

著者資格

OSは、研究の着想およびデザイン、文献の収集・分析、解釈結果、論文作成の研究全般に関与した。FSは、研究プロセスへの助言、データ分析と解釈に関与して、原稿への示唆、客観性確保に向けた助言等を行い貢献した。すべての著者は最終原稿を確認した。

<引用文献>

- 阿川慶子, 原祥子, 小野光美, 他 (2012). 高齢慢性心不全患者の日常生活における身体変化の自覚. 老年看護学, 17(1), 46-54.
- 浅野美知恵, 佐藤禮子 (2003). がん手術後2年から3年経過した患者とその家族員の社会復帰過程における自分らしさの回復. 順天堂医療短期大学紀要, 14, 13-24.
- 荒木雪葉 (2012). 「和の文化」論 - 「和爲貴」解釈を端緒として. 和の文化, 1, 3-14.
- Balthip Q, Petchruschatachart U, Piriyaakoonporn S, et al (2013). Achieving peace and harmony in life: Thai Buddhists living with HIV/AIDS. International Journal of Nursing Practice, 19, 7-14.
- Bode C, van der Heij A, Taal E, et al (2010). Body-self unity and self-esteem in patients with rheumatic diseases. Psychology Health & Medicine, 15(6), 672-684.
- Chan CH, Chan CL, Ng SM, et al (2005). Body-mind-spirit intervention for IVF women. Journal of Assisted Reproduction and Genetics, 22 (11/12), 419-427.
- Chukumnerd P, Hatthakit U, Chuaprapaisilp A (2011). The experience of persons with allergic respiratory symptoms: practicing yoga as a self-healing modality. Holistic Nursing Practice, 25 (2), 63-70.
- Cumbe SA (2001). The integration of mind-body-soul and the practice of humanistic nursing. Holistic Nursing Practice, 15(3), 56-62.
- Daly EB (1995). Health meanings of Saudi women. Journal of Advanced Nursing, 21(5), 853-857.
- Delmar C, Bøje T, Dylmer D, et al (2005). Achieving harmony with oneself: life with a chronic illness. Scandinavian Journal of Caring Sciences, 19(3), 204-212.
- Dropkin MJ (1989). Coping with disfigurement and dysfunction after head and neck cancer surgery: A conceptual framework. Seminars in Oncology Nursing, 5(3), 213-219.
- Ebrahimi Z, Wilhelmson K, Moore CD, et al (2012). Frail elders' experiences with and perceptions of health. Qualitative Health Research, 22(11), 1513-1523.
- Ellingsen S, Roxberg Å, Kristoffersen K, et al (2013). Entering a world with no future: a phenomenological study describing the embodied experience of time when living with severe incurable disease. Scandinavian Journal of Caring Sciences, 27(1), 165-174.
- Fabio AD, Tsuda A (2018). The Psychology of Harmony and Harmonization: Advancing the Perspectives for the Psychology of Sustainability and Sustainable Development. Sustainability, 10 (12), 1-15.
- 藤田佐和 (2003). がん体験者のサバイバーシップに関する研究の動向と課題. 高知女子大学看護学会誌, 28(2), 42-57.
- 藤田佐和 (2006). 退院後のがん体験者の適応過程における拡がり. 高知女子大学看護学会誌, 31(1), 5-18.
- 藤代知美 (2015). 精神科訪問看護を否定的にとらえた統合失調症をもつ利用者の訪問看護の体験. 日本精神保健看護学会誌, 24(1), 33-42.
- Haley J, Ratcliffe C (2006). Application of the Integrative Harmony paradigm and Model. Issues in Comprehensive Pediatric Nursing, 29(1), 53-68.
- Hallberg LR, Ringdahl A (2004). Living with cochlear implants: experiences of 17 adult patients in Sweden. International Journal of Audiology, 43 (2), 115-121.
- 原磨美 (2019). 終末期がん患者の最期まで自分らしく生きる力とがん看護におけるACPの検討. 第49回 日本看護学会論文集 慢性期看護, 259-262.
- Hodge DR, Limb GE, Cross TL (2009). Moving from colonization toward balance and harmony: a Native American perspective on wellness. Social Work, 54(3), 211-219.
- Hollman G, Ek AC, Olsson AG, et al (2004). The Meaning of quality of life among patients with familial hypercholesterolemia. Journal of Cardiovascular Nursing, 19(4), 243-250.
- Hsu MT, Kahn DL, Yee DH, et al (2004). Recovery through reconnection: a cultural design for family

- bereavement in Taiwan. *Death Studies*, 28(8), 761-786.
- 池添志乃, 野嶋佐由美 (2009a). 生活の再構築に取り組む家族介護者の介護キャリア. *家族看護学研究*, 15(2), 107-116.
- 池添志乃, 野嶋佐由美 (2009b). 生活の再構築に取り組む家族の介護キャリアの形成困難における悪循環. *家族看護学研究*, 14(3), 20-29.
- 生田奈美可 (2011). 配偶者を亡くした高齢遺族のスピリチュアリティに関する質的研究. *日本看護研究学会雑誌*, 34(2), 97-107.
- 石井容子, 宮下光令, 佐藤一樹, 他 (2011). 遺族、在宅医療・福祉関係者からみた、終末期がん患者の在宅療養において家族介護者が体験する困難に関する研究. *日本がん看護学会誌*, 25(1), 24-36.
- 石川紗貴子, 石井歩, 佐治美也子, 他 (2004). 糖尿病をもつ人の日常生活と療養法の調和－食事療法を中心として－. *高知女子大学看護学会誌*, 30(1), 16-17.
- Jim HS, Purnell JQ, Richardson SA, et al (2006a). Measuring meaning in life following cancer. *Quality of Life Research*, 15(8), 1355-1371.
- Jim HS, Richardson SA, Golden-Kreutz DM, et al (2006b). Strategies used in coping with a cancer diagnosis predict meaning in life for survivors. *Health Psychology*, 25(6), 753-761.
- Jonsson A, Aus G, Berterö C (2010). Living with a prostate cancer diagnosis: a qualitative 2-year follow-up. *The Official Journal Of The International Society For The Study Of The Aging Male*, 13(1), 25-31.
- 門屋秀一 (2016). 美術で綴るギリシアの宗教と思想－その永遠不滅志向と日本の中央希薄構造－, 116-117. 京都：晃洋書房.
- 川村三希子 (2005). 長期生存を続けるがんサバイバーが生きる意味を見出すプロセス. *日本がん看護学会誌*, 19(1), 13-21.
- Kay ML, Poggenpoel M, Myburgh CP, et al (2018). Experiences of family members who have a relative diagnosed with borderline personality disorder. *Curationis*, 41(1), 1-9.
- 北素子 (2002). 要介護高齢者家族の在宅介護プロセス：在宅介護のしわ寄せによる家族内ニーズの競合プロセス. *日本看護科学会誌*, 22(4), 33-43.
- 北村晴朗 (1965). 適応の心理, 11. 東京：誠信書房.
- 近藤まゆみ, 久保五月 (2019). *がんサバイバーシップ－がんとともに生きる人々への看護ケア－*第2版, 2, 70. 東京：医歯薬出版.
- 厚生労働省 (2018). *がん対策推進基本計画*, 3. [<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000196975.pdf>, 2020.1.26.]
- 厚生労働省 (2015). *保健医療2035提言書*, 9-10. [<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000088647.pdf>, 2020.1.26.]
- 工藤千晶 (2016). プラトンの教育課程論における「音楽」の位置に関する研究－3つの音楽概念を中心として－. *音楽文化教育学研究紀要*, (28), 51-60.
- 隈元泰弘, 長谷川重和 (2017). 教育の原理と特別活動の展開－ホリスティック教育の視点から－. *神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要*, (3), 17-35.
- Lee RL, Mok ES (2011). Seeking harmony in the provision of care to the stroke-impaired: views of Chinese family caregivers. *Journal Clinical Nursing*, 20, 1436-1444.
- Lee V, Cohen SR, Edgar L, et al (2006). Meaning-Making and Psychological Adjustment to Cancer: Development of an Intervention and Pilot Results. *Oncology Nursing Forum*; Pittsburgh, 33(2), 291-302.
- Lindvall MA, Anderzén Carlsson A, Forsberg A (2016). Basic Body Awareness Therapy for patients with stroke: Experiences among participating patients and physiotherapists. *Journal Bodywork and Movement Therapies*, 20(1), 83-89.
- Lowe J (2002). Balance and harmony through connectedness: the intentionality of Native American nurses. *Holistic Nursing Practice*, 16(4), 4-11.
- Lu L (2002). A preliminary study on the concept

- of health among the Chinese. *Counselling Psychology Quarterly*, 15(2), 179-189.
- Lundström S, Ahlström BH, Jormfeldt H, et al (2017). The Meaning of the Lived Experience of Lifestyle Changes for People with Severe Mental Illness. *Issues In Mental Health Nursing*, 38(9), 717-725.
- 松村明 (2006). 大辞林 第3版, 1643, 1650, 1720. 東京:三省堂.
- 見藤隆子, 小玉香津子, 菱沼典子 (2011). 看護学事典 第2版, 661. 東京:日本看護協会出版.
- 水野道代 (1997). 地域社会で生活するがん体験者にとっての健康の意味とその構造. *日本看護科学会誌*, 17(1), 48-57.
- 森谷利香, 鈴木純恵 (2009). 日本における多発性硬化症病者の経験に関する質的研究. *日本難病看護学会誌*, 13(3), 182-191.
- 盛下真優子 (2015). シェーラーの形而上学における人間形成論－調和と価値の観点から－. *教育思想*, (42), 105-124.
- Naemiratch B, Manderson L (2008). 'Normal, but ...': living with type 2 diabetes in Bangkok, Thailand. *Chronic Illness*, 4(3), 188-198.
- 永井眞由美, 小野ミツ (2007). 認知症高齢者を介護する高齢介護者の対処様式の特徴. *老年看護学*, 12(1), 49-54.
- 中島義明, 安藤清志, 子安増生, 他 (1999). *心理学辞典*, 161. 東京:有斐閣.
- 中戸川早苗, 眞嶋朋子, 岩崎弥生 (2016). 統合失調症をもつ人の就労と生活との調和の構築過程. *千葉看護学会会誌*, 22(1), 1-11.
- 日本歯科審美学会 (2015). 日本歯科審美学会 定款. 第1章 総則 第2条. [https://www.jdshinbi.net/pro/documents/rules_20150401.pdf, 2020.1.26.]
- 野村美香, 藤田佳子, 三井成子 (2004). がん治療過程における家族集団のゆらぎに関する研究. *死の臨床*, 27(1), 69-75.
- O'Connor M, Guilfoyle A, Breen L, et al (2007). Relationships between quality of life, spiritual well-being, and psychological adjustment styles for people living with leukaemia: An exploratory study. *Mental Health, Religion & Culture*, 10(6), 631-647.
- Olsson M, Nilsson C (2015). Meanings of feeling well among women with Parkinson's disease. *International Journal of Qualitative Studies on Health Well-being*, 10, 1-9.
- 大窪彬夫 (2014). ジンメル美学における「調和」について. *社会学研論集*, (23), 17-29.
- 小笹由香, 松岡恵 (2006). 羊水検査を受けることについての女性の価値体系. *日本助産学会誌*, 20(1), 37-47.
- Oxford University Press (2010). *オックスフォード現代英英辞典* 第8版, 710. 東京:旺文社.
- Pincharoen S, Congdon JG (2003). Spirituality and health in older Thai persons in the United States. *Western Journal of Nursing Research*, 25(1), 93-108.
- Rashotte J, Tousignant K, Richardson C, et al (2014). Living with sensor-augmented pump therapy in type 1 diabetes: adolescents' and parents' search for harmony. *Canadian Journal of Diabetes*, 38(4), 256-262.
- 酒井篤子, 稲吉光子 (2009). ホスピスで療養するがんサバイバーの生活の豊かさとその主体的営み. *日本がん看護学会誌*, 23(1), 70-81.
- 実松克義 (2018). 「和」－日本的調和の思想の起源と本質－. *応用社会学研究*, (60), 171-190.
- 関谷正美 (1998). 手術療法を受けた頭頸部がん患者の主観的な生活評価に関する研究－周手術期から術後2年間の変化のパターン－. *日本赤十字看護大学紀要*, (12), 34-50.
- 瀬山留加, 武居明美, 神田清子 (2013). 進行がん患者の家族が抱える苦しみの検討. *日本看護研究学会雑誌*, 36(2), 79-86.
- 島田美鈴 (2016). 初めてがんと診断され手術を受けたがんサバイバーのゆらぎ. *日本がん看護学会誌*, 30(3), 9-18.
- Shimizu Y, Paterson BL (2007). A cross-cultural comparison of the developmental evolution of expertise in diabetes self-management. *Journal of Nursing & Healthcare of Chronic Illnesses in association with Journal of Clinical Nursing*, 16, 350-357.
- 下中直人 (2004). *世界大百科事典* 18, 445-447. 東京:平凡社.

- 新村出 (2018). 広辞苑 第7版, 1906, 1914, 1993. 東京: 岩波書店.
- Scott DW, Oberst MT, Dropkin MJ (1980). A stress-coping model. *Advances in nursing science*, 3(1), 9-23.
- Shirahama K, Inoue EM (2001). Spirituality in nursing from a Japanese perspective. *Holistic Nursing Practice*, 15(3), 63-72.
- Simonelli LE, Fowler J, Maxwell GL, et al (2008). Physical sequelae and depressive symptoms in gynecologic cancer survivors: meaning in life as a mediator. *Annals of Behavioral Medicine*, 35(3), 275-284.
- Songwathana P, Watanasiriwanich W, Kitrungrrote L (2013). Holistic self-care for rehabilitation experienced by thai buddhist trauma patients in areas of political and social unrest. *Journal of Trauma Nursing*, 20(4), 203-207.
- Sun V, Kim JY, Irish TL (2016). Palliative care and spiritual well-being in lung cancer patients and family caregivers. *Psycho-oncology*, 25(12), 1448-1455.
- 高山良子(2012). 再発を繰り返す肝臓がん患者の調和. 高知女子大学看護学会誌, 37(2), 12-20.
- 竹田恵子, 太湯好子, 桐野匡史, 他 (2007). 高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発-妥当性と信頼性の検証-. 日本保健科学学会誌, 10(2), 63-72.
- 戸田由利亜, 谷本真理子, 正木治恵 (2017). 他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿. 千葉看護学会会誌, 22(2), 1-10.
- 上垣渉, 根津知佳子 (2013). 音楽療法における数学的パラダイムに関する研究. 三重大学教育学部研究紀要, 64, 41-60.
- 上野治香, 山崎喜比古, 石川ひろの (2014). 日本の慢性疾患患者を対象とした服薬アドヒアランス尺度の信頼性及び妥当性の検討. 日本健康教育学会誌, 22(1), 13-29.
- 瓜生浩子, 野嶋佐由美 (2015). 高次脳機能障害者と共に生きる家族の調和を創成するFamily Hardiness. 高知女子大学看護学会誌, 41(1), 9-22.
- Villagomez LR (2005). Spiritual distress in adult cancer patients: toward conceptual clarity. *Holistic Nursing Practice*, 19(6), 285-294.
- Walker LO, Avant KC (2005) / 中木高夫, 川崎修一訳 (2008). 看護における理論構築の方法 第1版, 89-122. 東京: 医学書院.
- Watson J (2012) / 稲岡文昭, 稲岡光子, 戸村道子訳 (2014). ワトソン看護論-ヒューマンケアリングの科学- 第2版, 87-102. 東京: 医学書院.
- 山岡深雪 (2007). 慢性疼痛をもつ患者の自己調整力を支援する看護者に求められる能力. 宮崎県立看護大学研究紀要, 7(1), 13-31.
- 山内英樹 (2016). 心臓手術を受けた患者の回復過程におけるICU体験とICU退室後の記憶の様相. 東京女子医科大学看護学会誌, 11(1), 1-11.
- 山崎あけみ (1997). 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念-「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析-. 日本看護科学会誌, 17(4), 1-10.
- Yurkovich EE, Lattergrass I (2008). Defining health and unhealthiness: Perceptions held by Native American Indians with persistent mental illness. *Mental Health, Religion & Culture*, 11(5), 437-459.